

P-125

短期入院の多い小児病棟で働く看護師のやりがいに関する調査

釧路赤十字病院 看護科

○佐々木亜衣、岡田 千春、廣島なつみ

【はじめに】当病棟は、2次救急医療の患者を24時間365日受け入れており、急性期疾患が95%を占めている。また、即日入院が10人を超えることもあり、平均在院日数が約4日間と入退院が多い。そこで、当病棟の看護師が現状をどのように考え、やりがいや達成感が得られているのかを小児看護経験年数に焦点を当てて調査し、傾向と課題が明らかになったのでここに報告する。

【データの収集・分析方法】藤原千恵子氏の「小児の看護師ストレス尺度」と自作アンケートを別で作成し、当病棟の同意を得た看護師にアンケートを実施した。分析はマン・ホイットニー検定を用いた。

【結果・考察】本研究結果から、小児看護経験年数が短い看護師がやりがいを感じていないことが明らかになった。この現状を改善していくには、ベッドサイドにいける時間を増やし、患児・家族と関わる時間を確保していく必要がある。そのためには、他領域での経験が長い看護師の意見を反映し、カンファレンスや意見交換の場を増やすことが望ましい。また、経験年数に関係なく満足していないことも明らかとなった。病棟の現状を見直すことで、看護師間の意思統一が図れ、患児・家族への関わりや指導ができる時間を確保できると考えた。小児看護の専門性が高められ、個別性のある看護が提供できることで、やりがいや達成感につながると言える。

P-127

看護師の看護計画の評価に対する満足度調査

仙台赤十字病院 看護部

○曾根 未来、高橋周太郎、鈴木 由美

【はじめに】

在院日数が短縮し、入院期間中に看護計画の評価・修正を行うことが難しい。看護計画の評価に対する満足感と影響する要因を明らかにすることを目的とした。

【方法】

1対象者：外科系病棟看護師19名。内科系病棟看護師37名。
2調査期間：平成23年12月28日～平成24年1月13日
3調査方法：選択自己記入式アンケート調査。看護計画の「評価にかかる時間」「評価日の設定」「評価に満足しているか」「満足していない理由」について4段階で回答。統計的解析t検定とフィッシャーの直接確率検定。

【結果】

1.回収率外科100%、内科62%
2.看護計画の評価：初回の評価は外科で5.13日目、内科では6.21日目に行っていた。外科72%、内科91%が、看護計画立案時に評価日の設定をしていなかった。評価にかかる時間は外科20.13分、内科12.85分であった。
3.評価に対する満足感：外科「あまり満足していない」「満足していない」13名(77%)。内科「あまり満足していない」「満足していない」21名(81%)。
4.満足感に影響する因子：満足感がない理由は、外科「看護業務に時間がかかるため評価が行えない」「個別性のある計画がたてられていない」「計画を評価・修正したものを患者と共有できていない」。内科「個別性のある計画がたてられていない」「看護業務に時間がかかるため評価が行えない」「看護計画の評価に時間がかかるため行えない」。時間がかかると感じる業務は、外科「入退院の処理」「日常生活ケア」「手術前後の準備」。内科「入退院の処理」「日常生活ケア」。

【まとめ】

1.看護計画の評価に対して8割以上が「あまり満足していない」「満足していない」と回答。
2.理由は「看護業務に時間がかかるため評価が行えない」「個別性のある計画がたてられていない」であった。
3.時間がかかる看護業務は「入退院の処理」「日常生活ケア」であった。

P-126

働きやすい職場づくりに向けた看護業務改善の取り組み

旭川赤十字病院 看護部業務改善委員会

○十河 幸代、野呂 美幸、前田 章子

【目的】

A病院看護部業務改善委員会では、看護職員の職務満足度調査を平成21年度より毎年実施している。職務満足度調査結果は2年続けて「看護業務」に関する満足度が低く、要因として超過勤務時間があった。そこで今回、働きやすい職場づくりに向けて職員満足度向上を図るために、委員会として効果的な関わりを明確にすることを目的に検討した。

【方法】

期間：平成23年6月～平成24年3月

対象：A病院看護職員608名

方法：1)係長会議を利用し業務に関する問題点の明確化と改善策の立案、その後各部署で業務改善の取り組み、2)各部署別の超過勤務時間を調査し単純集計、3)職務満足度調査実施（Stampsが開発し尾崎ら（1988）が翻訳した日本語版職務満足尺度を使用）倫理的配慮として個人が特定できないよう配慮した。

【結果】

係長会議で抽出された問題は、「リーダーの業務量が多い」「超過勤務時間が多く自分の時間が持てない」等であった。立案された改善策は、「リーダー業務の見直し」「超過勤務時間の短縮」「各種記録時間の短縮」等で各部署で取り組みを行なった。業務改善の進捗状況を係長会議で報告・共有する等、委員会を中心に推進した。超過勤務時間は前年度と比較し、一人当たりの月平均で1時間15分短縮した。職務満足度調査結果は前年度とほぼ同様の結果だったが、看護業務に関する項目の満足度が向上した部署もあった。

【まとめ】

看護部業務改善委員会は各部署の業務改善の調整をとり共有の場をつくるのが重要である。今回、業務改善で超過勤務時間の短縮につながったが、職員満足度の向上には至らなかった。今後は、職員のモチベーション向上に向けた取り組みが課題と考える。

P-128

入院中の看護サービスに対する患者満足度

岡山赤十字病院 看護部

○尾本めぐみ、石田 民恵

【はじめに】当院では患者サービスを推進し良質な看護の提供を目的に、患者サービス推進委員会が活動している。今回、入院患者に提供している看護サービスを振り返り看護の質改善を目的に、患者の満足度を調査しいくつかの示唆を得たので報告する。

【方法】平成23年10月に入院した患者を対象に、入院時に調査票を渡し退院時に回収BOXへ投函してもらった。調査票は自記式、無記名で個人が特定されないこと、参加は自由意志であることを口頭で説明した。調査内容は、看護師の対応、接遇、ナースコール対応、訴えの傾聴、他職種との連携など17項目で、大いにそう思う4、ややそう思う3、あまりそう思わない2、全くそう思わない1の4段階評価とした。

【結果】有効回答数216、回収率22.9%であった。4及び3を合わせて「そう思う」と答えた割合が95%を超えたのは14項目であった。2及び1を合わせて「そう思わない」と答えた割合が5%以上だった項目は、医師と看護師の情報共有、職員間の情報共有、治療の継続や退院後の生活についての相談対応に関する3項目であった。自由記載では、看護師への感謝の言葉が殆どであったが、接遇や言葉遣い、看護技術に関すること、他部門に関する意見があった。

【考察】入院中の看護サービスに対して患者は概ね満足していた。看護師と他職種との情報共有については、コーディネーターとしての役割を意識し患者の訴えや要望を適切に伝達していく必要がある。治療や退院後の生活相談については、入院期間が短縮化している中でも患者のニーズを踏まえた退院支援ができる力を育成していく。看護師の接遇に関しては今後も委員会で自他評価を行い改善に努めていく。他部門に関しては、各部門へ伝達し改善を依頼していく。患者の貴重な意見はサービス改善のよいきっかけとなった。